



タジキスタン共和国研修員受け入れ

大学院看護学研究科長 金川克子



石川県立看護大学では JICA の依頼のもと、平成 17 年度より 3 年間の予定で、タジキスタン共和国の医師や看護職の研修を実施している。

その詳細な経緯は別に譲るが、JICA（国際協力機構）は保健医療分野では、これまでに本邦研修、第三国研修、医療特別機材供与、無償資金協力を実施してきたが、今後もタジキスタン政府の開発方針に基づきタジキスタンでの保健医療分野の改善に向けた自助努力を継続的に支援していく方向にあるとされている。

このような経緯を背景に当大学が短期的な協力内容を策定する目的で、JICA 職員等とともに、15 年に母子保健や公衆衛生の現地調査に加わり、本学での研修の計画に繋げることができた。

早速に本学は、JICA 北陸、JICA タジキスタン連絡事務所、石川県・同県国際交流会・同県内施設と研修実施体制を組み、17、18 年度に概ね 2 ヶ月（毎年 11-12 月）間、研修の運営・指導の実際を行った。

研修員は 17 年度では医師 4 人、看護職 2 人に対し、18 年度は医師 6 人であった。

研修内容の主なものは日本の母子保健の現状と歴史、母子保健サービス、プライマリーケア、子育て支援に関する理論と実際であり、講師陣は学外者にもお願いしたが、大部分は本学教員が担当した。

研修の最大の目的は研修員がこれら研修内容を参考に、本国での母子保健・公衆衛生の改善にとりくむことであり、そのためのアクションプランづくりの意義が大きい。

研修員が本学での研修中には、教職員や学生との交流もあり、今後の国際交流にも大いに貢献できたとうれしく思う次第である。

目次

タジキスタン共和国		夏期アメリカ看護研修報告	4
研修員受け入れ	1	ワシントン大学学術交流事業	4
平成18年度卒業式・学位授与式	2	第7回看大祭を終えて	5
卒業生の言葉	2	サークル活動紹介	5
卒業研究発表会	3	この1年を振り返って	6
修士論文発表会	3	図書館案内	8
卒業生の内定状況	3	地域ケア総合センターから	8
		キャンパススケジュール	8



石川県立看護大学

ISHIKAWA PREFECTURAL NURSING UNIVERSITY

大学 看護学部看護学科
大学院 看護学研究科

〒929-1212 石川県かほく市中沼ツ7番1
TEL 076-281-8300 FAX 076-281-8319
URL <http://www.ishikawa-nu.ac.jp>
E-mail office@ishikawa-nu.ac.jp

大学の主な動き

平成18年度卒業式・学位授与式を終えて

風はまだ冷たいけれど柔らかな陽射しに恵まれた3月17日、谷本知事はじめ来賓の方々のご臨席のもと、平成18年度卒業式・学位授与式が本学講堂にて挙行された。学部卒業生85名、大学院博士前期課程修了生7名のどの顔も輝いて見えた。学業を支えてこられたご家族には感慨一入のことと思う。学長から卒業証書・学位記が卒業生一人一人に手渡された。単科大学ならではの厳粛でありながらも、学生個々が大切にされる温かな光景である。手渡された証書の重みを、これからの社会人生活に向けてしっかりと受けとめてくれていたと思う。

学長の式辞では、今日の卒業生・修了生の姿を万葉集の萌え出る春の和歌にたとえて喜びを表され、厳しい保健・医療現場に本学卒業生としての自信と誇りを持って歩んでほしいとのほなむけの言葉が贈られた。また、知事からは祝いの言葉とともに、本学が建学の目的に立ち戻り社会に貢献できる人材を育成できるよう努力を重ねていきたいとの告示が述べられた。在学生代表の3年磯見冴子さんの送辞に対し、卒業生代表の谷崎香織さん、修了生代表の彦聖美さんが答辞を述べた。澄み切った青空のもとで知事・教職員とともに撮った記念撮影でのほほけるような笑顔が印象的であった。これからの活躍を祈りたい。



卒業生の言葉



4年 田畑 真奈

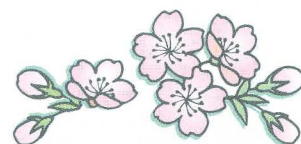
私にとって、この4年間はとても充実した毎日でした。大学の講義や実習、アメリカ看護研修、ボランティア活動、サークル活動等数多くの貴重な経験をする事ができました。これらの経験を通して学んだことや、実習で関わらせていただいた患者さんをはじめ先生や友人等様々な人との出会いは私の大切な宝物です。特に、4年間共に語り、励まし合いながら過ごした仲間の存在は私に大きな影響を与えてくれました。実習やアメリカ看護研修を通して、患者さんの個性に合わせた看護を提供することの難しさや自分の意見を積極的に述べることの大切さを学びました。このような経験や出会いを通して、自分の理想の看護について考えること、視野を広げ人間性を深めることができ、4年間でより大きく自分自身を成長させることができました。今後、医療従事者として現場で働いていく上で様々な困難にぶつかったとしても、大学で得た経験や仲間の存在が私の大きな原動力となり、きっと乗り越えていけると思います。一つ一つの経験や出会いが自分自身を成長させてくれると確信しています。そのため、これからの経験や出会いを大切に自分自身を高め、より良い医療従事者になれるように努力していきたいと思っています。最後に、常に向上心をもって学び、自分が考える理想の看護を1人でも多くの患者さんに提供できるように日々努力して頑張っていきたいと思っています。

修了生の言葉



健康看護学領域 コミュニティ分野
大学院2年 彦 聖美

暖かな日差しのもと期待と緊張の中大学院生活をスタートし、はや2年が過ぎた。年齢も経歴も違う仲間10人と共に学習する毎日は、楽しく有意義な日々であった。集い合った10人の年齢構成はバランスがよく、まるで一つの病棟組織のごとくであり、特に、他の院生達の様々な経験は、看護の基本に立ち返りながら、携わってこなかった世界を知る上で大いに役立つ事となった。思い出に残っているのは、タジキスタンからの研修生をお招きした折、分からないロシア語を勉強したり、日本の伝統文化を伝えようと知恵を絞り、ホストとしてみんなで力を合わせて取り組んだ時のことである。また、外国人の先生も何度かお招きし、国際交流を身近で感じたことも、思い出に残っている。これから私は、さらに博士後期課程で研究を続け、他の院生はそれぞれの道で、この2年間学んだことを発展させる戦いが始まる。春は別れともにとりついてみせる』と心に誓い、軽やかにすすんでいきたいと思う。



卒業研究発表会

平成18年12月25日に、卒業研究発表会がありました。本学開設後今期で4回目になります。4年次学生85名にとっては、卒業前の最後の授業科目「卒業研究」の試験に位置づくものです。

「発表会」と言うよりも、本学では卒業研究の「研究発表」ということで、学生一人ひとりが取り組んだ研究成果を10分で伝え、5分で会場からの質疑に応じるというものです。従ってこの場合は、このような「研究発表」が出来るかどうかが問われることとなります。他の学生の発表をきちんと聞いて、的確な質問・意見を伝えることも一部望まれます。

4年次学生は今年度4月から、教員1人に対し学生2～4名ずつに別れ、一人ひとりが研究テーマをもち取り組んできました。12月2日までに論文として提出し、その後口演用に組み直して発表に臨みます。

会場は、大講義室、中講義室1～4の5ヶ所でした。どの会場も、緊張の中十分に洗練された発表と、活発な質疑応答がなされておりました。研究フィールドとして、ご協力いただいた関係機関の方々も数多く聞きに来て下さり、暖かいねぎらいの言葉と、さらに考察が深められる意見もいただいております。紙面をお借りして、厚くお礼申し上げます。

卒業研究専門部会の責任者として、質疑応答の時間が5分では足りない!と苦情がでるのではないかと、嬉しい懸念を抱かざるを得ませんでした。このあたり鋭敏かつ有意義に進めてくださいました座長の先生方にも、感謝申し上げます。

発表会の後は国家試験・卒業式を経て、看護実践の場やさらなる修学の場に進みます。いずれの場においても、看護の事象を研究的な視点で捉え、看護専門職としての能力を研鑽し続けることとなります。この卒業研究での一連の取組が、その一助になることを願ってやみません。

修士論文発表会

2月21日に18年度修士論文発表会が開催され、本学大学院生がこれまでの研究成果を発表しました。本学大学院前期(修士)課程は、2004年に設置され、昨年第1期の修了生を出したところです。修士論文発表会はこれで2回目になります。本年度は8題の研究発表がありました。発表時間は1題あたり20分(発表12分、質疑8分)であり、一般的な学会発表と比べて質疑の時間に余裕を持たせてあります。これは、発表を一方的に聞かせるだけでなく、研究の内容について参加者と十分な議論ができるよう配慮したためです。実際、発表会では多くの参加者からは活発に質問・意見が出され、充実したディスカッションができたと思います。修士論文は卒業研究よりも一段高い内容が求められます。このため、一部手厳しい意見もありましたが、そういう点も含めて修士論文らしい発表会であったと考えています。



卒業生の内定状況

3月上旬現在の就職・進学内定状況は、これまでに引き続き第4期生についても100%となっております。

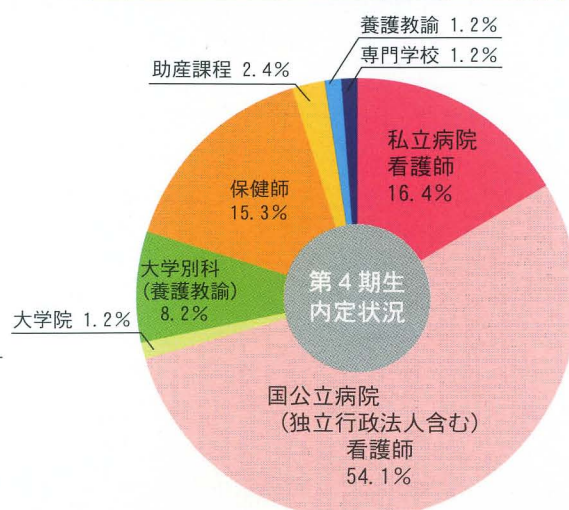
< 県内就職 >

石川県立中央病院
石川県立高松病院
国立病院機構金沢医療センター
金沢大学医学部附属病院
石川県済生会金沢病院
松任石川中央病院
金沢赤十字病院
市町村保健師など

< 県外就職 >

北里大学病院
順天堂大学医学部附属病院
福井県立病院
埼玉県立小児医療センター
国立病院機構京都医療センター
新潟大学病院
市町村保健師など

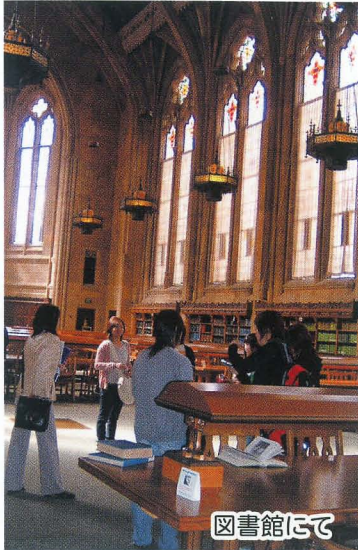
第4期生内定状況(平成19年3月上旬現在)



夏期アメリカ看護研修報告

引率教員 林 みどり

2006年夏、本学の学部生11名、大学院生2名は2週間の国際看護プログラム夏期アメリカ看護研修を受けてきました。研修先のワシントン大学（ワシントン州シアトル）はネオゴシックスタイルの建物が立つ、自然の豊かなキャンパスでした。主に午前中は英語レッスンや講義、午後に施設見学をしました。日本語を使えない英語レッスンでも、分かりやすく話す先生からホームステイに必要な会話を学びました。施設説明では、通訳の方から適宜補足説明がありよく理解できました。

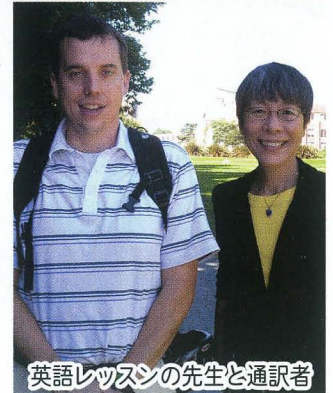


図書館にて

研修の成果は、10月2日、修了証書授与式と同時に開催された報告会で披露されました。学生達はパンフレット「We love Seattle 2006」とスライドを準備し、学びを報告しました。メディケアとメディケイドは米国のヘルスケアシステムの基本であり、日本と異なる医療制度での医療・看護から大いに学ぶ点があったようです。多くの見学先から選択したのは、小児病院であるオデッサブラウン、宗教と看護が結びついたパリッシュナース、癌患者をはじめ家族や友人を支援する非営利団体キャンサーライフラインでした。そして日々お世話になったホストファミリーやシアトルでの生活を、たくさんの写真で公開しました。学生達の大切な研修を支援してくださった皆様に感謝いたします。



ワシントン大学キャンパス



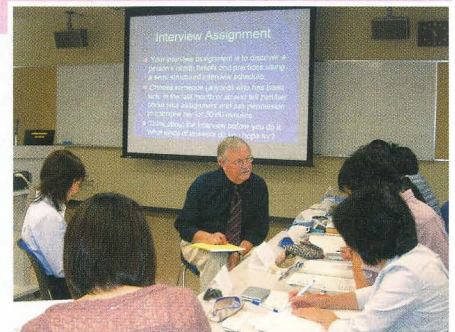
英語レッスンの先生と通訳者

ワシントン大学学術交流事業

ワシントン大学との学術協定により、今年度は9月12日から24日までの2週間、ワシントン大学看護学部教授ノエル・クリスマン博士を客員教授として招聘しました。

大学院博士前期課程の科目である「国際看護特論」の講義は、「Planning and Conducting Qualitative Research」というテーマで、質的な研究のデータの代表的な収集方法である観察法やインタビュー法を具体的にわかりやすく講義をして下さいました。先生は受講生に、休日に人々が集まる場所に行き、観察をしてもらうように課題を出されて、一人一人の発表から観察の方法や視点、データのまとめ方を説明して下さいました。残暑の厳しい時期でしたが、あっという間に講義が終わってしまうと感じるくらい興味深い講義でした。講義が終わっても先生のお部屋に院生がひきもきらずに質問に行く姿が毎日みられました。教員向けの講義は、「Innovations in the Community Health Nursing Curriculum at the University of Washington」というテーマで、ワシントン大学の地域看護学領域のカリキュラムについてお話いただきました。この講義は通訳が付きませんでしたでしたが、教員から次々に質問が出て、活発な意見交換の場となりました。

保健医療職者向けの講演では、「Transcultural Nursing : Holistic Cultural Care for Your Patients」というテーマでした。異なる文化的背景を持つ患者の看護というのは、日本においてあまりなじみがないかもしれませんが、同じ日本人でも地域や職種、世代などで異なる価値観や習慣、文化をもっています。また、国際観光都市である金沢には毎年多くの外国人がやってきますし、石川県で就労している外国人も年々増えています。そういった異文化の人々が患者となった場合、どのようなケアの視点が必要かということをご講演いただきました。あいにく台風で天候が不順でしたが、たくさんの方が参加されました。クリスマン博士は文化人類学者であることから、大変人々の行動や会話に興味を示され、空港での光景や、レストランのウェイトレスの行動、国際交流の集いで披露された大学院生の踊りなど実在的に物事を観察され私たちに話して下さるので驚きの毎日でした。また、日本に在る間は日本の文化的習慣にできるだけ近づきたいということで、お箸で食事されたり、お寺でのホームステイでは、畳の上で布団で寝るといった体験もされました。逆にアメリカの独立記念日における家族団らんなど写真をとおしてご紹介下さり、まさに異文化の交流ができた2週間でした。



キャンパスライフ

第7回看大祭を終えて

Kandacation

大学祭実行委員長 星野 夏樹

昨年度の10月28、29日に行われた本学の大学祭は、"kandacation"（看護大+コミュニケーション）のスローガンの下、大盛況に終わることができました。大学祭から数ヶ月たった今でも教室や廊下で普段着としてスタッフトレーナーを着ている学生をみるたびに大学祭がまるで昨日のことだったかのように感じます。

思えば昨日の5月、2年生の実行委員会でも右も左も分からない手探り状態で準備が始まりました。今年度は実行委員会だけで作る大学祭ではなく学生が丸となって、皆が参加する大学祭にしようという強い決意のもと準備を行いました。例年通り3・4年生は実習や卒論で忙しい時期ということもあり、1・2年生中心の大学祭でした。1年生は縁日を、2年生は模擬店を4グループずつに分かれて準備をし、他にも催し物としては看護体験や子供の絵の展示、各サークルの出し物などを企画しました。かほく市周辺の青年会の方々にも力添えをして頂き、模擬店を出していただきました。また、今年度の講演会には「1リットルの涙」の著書である故木藤重也さんのお母様、木藤潮香さんに来て頂き、これからの医療者にもとめること、家族の思いということで「看とるところ」についてお話いただきました。

そして、皆の努力の甲斐あって、大学祭当日には、地域の方々をはじめ多くの方に大学に足を運んでいただくことができました。

この場をお借りして、大学祭に関わっていただいた先生方をはじめ、地域の方々・企業の皆様に深くお礼申し上げます。

大学祭の二日間、私は多くの人の笑顔に会うことができました。友の笑顔、始めてみる人の笑顔、家族の笑顔。Kandacationが皆さんの笑顔を引き出すお手伝いできたかと思うだけであの日の私はとても幸せを感じることができました。そして、花棚副実行委員長をはじめ、実行委員会の皆と涙し、必死に頑張った日々は私にとって何よりの宝物です。皆ありがとう。ここは、大学祭の終わりに言った花棚さんの言葉でしめたいと思います。

「kandacationは永遠に不滅です。」

サークル活動紹介

手話サークル

2年 山本 佳奈



手話サークルは、現在1年生10人、2年生2人の計12人で活動しています。

木曜の放課後、小講義室にたま

に集まって、歌を手話でやってみたりしています。指文字（五十音のひらがなを指の形だけで表すもの）から始めて、簡単な挨拶や感情などなどいろいろな手話を勉強していきます。その成果を発揮させるのが、1年に2回ある手話検定です。NPO団体が主催しているものなのですが、ビデオを見て、その人がどんな意味の手話をしているのか答えるテストです。友達同士で行うつたない手話でなく、すらすらと進むので、難しいです。しかしこの前の検定ではほとんどのサークル員が、目標の級に合格にすることができました！！まだまだ力不足で、手話だけで会話することはぜんぜんできませんが、少しずつ前進していることがわかって楽しいです。

将来、看護師となったとき患者さんに手話が必要な方がいたときには、力になってあげられるようにがんばりたいと思っています。

ボランティアサークル

2年 石田 真佑美

ボランティアサークルは、学校内の活動だけでなく、学校周辺でのボランティア活動や、県内大学のサークルが集合してのボランティアなど、幅広い活動をしています。特に学校周辺地域での活動が多く、今年は海岸清掃に参加し高松の海をみんなで掃除したり、かほく市の障害児の子どもたちと楽しく遊んだりしました。また夏休みには、珠洲市で開催された第14回日本ジャンボリー（ボイスカウトの祭典）に参加し、夜はみんなで泊まり楽しい思い出が出来ました。看大祭では毎年恒例のソーラン節を踊って盛り上がりました。その他にも通年でかほく市の1人暮らしの高齢者の家に行きお話をする訪問ボランティアや骨髄ドナー登録受けボランティア等もやっています。

ボランティアを通じて対象者の方との交流はもとより、サークルメンバーや他の参加者の人たちとも仲良くなれます。また、ボランティア活動は多種多様なので、学校の授業では経験出来ないこともあります。興味のある方は是非ボラサに入って一緒にボランティアをしましう！！



この1年を振り返って



1年 井上 智晴
基礎看護学実習Ⅰ

今回の実習を通して初めて障害を持っている方と接し、初めはなかなか相手の言っていることが聞き取れずにとっても苦勞しました。当初、私は何かをしてあげたいとか何ができるのかとばかり考えていました。しかし、そうではなくその人を知りたいというしっかりとした目的意識を持ち、相手を観察したり、側にいたり、声に耳を傾けることで言っていることや言いたいことが少しずつ理解できるようになりました。そのような中だからこそ、普段の我々の生活がいかに言葉によってコミュニケーションがなされているのかを強く感じさせられました。また改めて、おはようやありがとうなどの我々が普段当たり前のように使う一言一言の言葉の力やありがたさを感じました。一度きりの人生だからこそ、その人らしい一瞬一瞬が送れるようにしっかりと目的意識を持って人と接することがとても重要であることを感じました。

人はそれぞれ感情や考え方は異なり、表現の方法も違って来る中で、それを完全に理解することは簡単ではありません。しっかりと一人一人と向き合い、相手の心に耳を傾け、受け入れ、理解したいという姿勢がとても大切です。看護師を志す我々は今後、看護を提供していくにおいて、一人一人の人生、生き方を反映させたものとしていかなければならない。まったく同じ人生を送っている患者はいない。つまり全く同様の看護は存在しません。私は患者との信頼関係を深め、その人らしい人生を送れるよう、どんな病気を持った人間であるかを考えるよりも、どんな人間が病気になったのかを考え、患者の生き方を支えられるように看護の側から貢献できるように頑張っていきたいと実習を通して感じさせられました。



2年 藤垣 友里
基礎看護学実習Ⅱ

2年生のこの一年間を振り返ると、看護師という仕事・存在がより実感できる年でした。特に印象深いのは、基礎看護実習Ⅱです。初めて一人の学生に一人の患者を受け持たされただけでなく、2週間という初めての長い実習期間での患者との関わりを持つこととなるなど、初めてづくしの実習でした。この実習では、決められた実習期間内で、患者のアセスメントから看護計画をもとに、それを実行して評価する所までしなければなりません。そのため、患者のアセスメント・ケア等様々なことをしたいと思っても、患者の体調が悪かったり、他のケア・治療を受けているため、自分のしたいことができず、計画が上手く達成出来ないことから、焦って物事を進めようとしてしまいました。その結果、患者の症状を緩和させるはずが、逆に症状を悪化させる原因となってしまいました。そのことから、大学から出ている実習課題にとらわれて、目の前の患者の状況が見えておらず、自分の都合で物事を進めようとし、一番基本となる患者の立場に立って物事を考えるということが出来ていなかったといえます。それを気付かせてくれたのは、患者でした。そのため、実習期間中、看護という役割・存在を一番教えてくれたのは、大学の先生でも、病院の看護師でもなく、患者だったのではないかと思います。私たちが立派な看護師になれるかどうかは、自分の行っている看護がこれで良いのか見直させてくれる患者の存在があるかないかどと感じました。初めて一人の学生に一人の患者を受け持たされること、患者と接する上での看護師の接し方・役割を知ること、さらに患者の存在の大きさを知ることという面で、この2年生の基礎看護実習Ⅱは重要な意味をもっていったと思います。将来、病院などで働くこととなった場合、こんなに一人の患者に時間をかけて接することは少ないと思います。そのため、新米の私たちが関わることを許してくれる患者の心の広さに感謝しつつ、またここで得た体験・気持ちを人生の財産として今後の実習・将来の仕事に臨んでいきたいです。

この1年を振り返って



3年 第Ⅴ段階実習
松本 明花

私は最初、実習はとても忙しくて辛いものだというイメージしかありませんでしたが、実際に実習をしてみると毎日がとても新鮮で楽しかったです。受け持たせていただいた患者様一人一人の疾患や患者様を取り巻く環境が異なっていました。全ての方に共通していえる事は、言葉だけでなく表情や動作などなんらかの方法で思いを表出しており、私達はなぜそのような行動をしているのかを察し、思いをくみ取る事が大切であると学びました。またこのような姿勢で関わっていくことで問題解決への糸口が見つかったり、患者様との信頼関係が生まれていくのだと思いました。また患者様の一番近くにいる私達であるがゆえに見えてくるものもたくさんあると思いますが、反対にいつも患者様から見られていることを忘れずに患者様との関係で悩んだ時などは自分の態度（姿勢）を振り返り、どんな時も心に余裕を持って接する事が大事であると思いました。また各実習毎に同じ看護師を目指す仲間たちと多くのディスカッションをして、学びを共有することで、自分の視野もさらに広げる事が出来たように思います。

実習は自分自身を振り返り、看護師としての考え方、看護に対する意識について考えるよい機会となったので、今回のこの学びを次のステップにつなげていき、患者様から見てキラキラした声のかけやすい看護師を目指して残りの学生生活を過ごしていきたいと思っています。



1年 大学院
澤本 美千代

私の11年の病院勤務は貴重な経験ができた充実した時間でした。そんな中で退職を決めて大学院への進学は、今までの経験を基に深く考えて知見を深めつつ、研究に取り組みたいという思いからでした。授業では臨床経験をイメージして、『あの症例はこんな場面だった』と照らし合わせたり、授業内容は自分の行ってきた看護の根拠となる有意義なものでした。また、先生方の私の勉強や研究テーマに沿ったご指導・ご支援にとっても感激しています。

大学院に進んで一番うれしかったのは、クラスメートみんながそれぞれに看護への熱い情熱を含んだ看護感を持ち、その思いを語り合えること、そして『私もがんばろう』と思いを立ててくれることです。反面、普段の院生室はしゃれっ気のある笑いにあふれたアットホームな雰囲気、みんなで日帰り旅行をしたり学生割引を使って美術館に行ったりと授業や課題に忙しい中でも、積極的に女子大生ライフを満喫しています。この1年は悪戦苦闘の学生業の経験を通して看護師としてだけでなく、33年間の人生も振り返る時間を与えてくれたように思います。改めて両親をはじめ、家族、友人、そして私を支えて下さる周囲の方々へ感謝いたします。

ここで得た学びをどのように次に活かすか、またまた分岐点に立っています。あと1年、また新しい経験ができる可能性ある学生生活をエンジョイしつつ、進路も考えて勉強・研究に取り組んでいきたいと思っています。

図書館案内

1階 カウンター

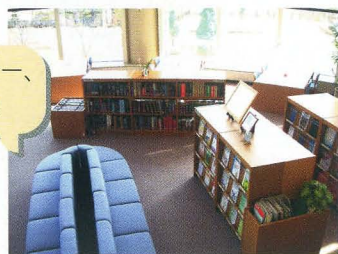


利用者用端末機、
持込パソコンコーナー



カバン類、袋物は持込みできません。館内入口の荷物用棚をご利用ください。
1階守衛室前にコインロッカーがあります。

1階 雑誌コーナー、 参考書コーナー他



ナイチンゲールコレクション

自筆書簡、『看護覚え書』
初版本、研究本等全28点を
展示しております。



2階 学会誌、研究紀 要コーナー、マルチメ ディアコーナー



☆ご利用については、石川県立看護大学ホームページ
<http://www.ishikawa-nu.ac.jp/index.html> をご覧ください。

地域ケア総合センターから

看護研究スキルアップ講座 統計の基礎コース

本年度からスタートした「看護研究スキルアップ講座」は、現場での研究経験者を対象とした講座で、『統計を使う』、『研究論文を探して使う』、『研究論文を読み解く』等、研究過程の一部を切り取って丁寧に説明したり、研究に必要な実技等を受講者に体験してもらうものです。統計の基礎コースは2種類あり、それぞれ2回、パソコンでエクセルや統計ソフトSPSSを使いながらの講義が行なわれました。1回の講座に25～34名が参加され、難解な統計学に挑戦しました。講座後のアンケートには、「わかった」「おおよそわかった」と回答された方が多く、“統計ソフトの使い方が勉強になった”“繰り返しの実技や課題をすることで身についたのではないかな”等の前向きな反応とともに、“もっと時間を長くしてほしい”“どんな場合にどんな分析を使うのか知りたい”等の要望も挙げられました。また、受講者の準備状態を事前に確認し、必要に応じ初歩コースを作ることも課題です。現場のニーズに対応していくために、現在、平成19年度の講座の準備中です。

キャンパススケジュール 2007年度

前 期	入学式	4月 5日(木)
	ガイダンス	4月 5日(木)～4月 9日(月)
	健康診断	4月 9日(月)
	授業開始	4月10日(火)
	履修登録受付	4月10日(火)～4月20日(金)
	開学記念日	5月29日(火)
	オープンキャンパス	7月中旬
	補講・試験	7月24日(火)～8月 9日(木)
	夏期休業	8月10日(金)～9月30日(日)
	夏期アメリカ看護研修	8月28日(火)～9月10日(月)

後 期	授業開始	10月 1日(月)
	履修登録受付	10月 1日(月)～10月12日(金)
	大学祭(看大祭)	10月27日(土)～10月28日(日)
	冬季休業	12月25日(火)～ 1月 7日(月)
	大学入試センター試験準備日	1月18日(金)
	補講・試験	2月25日(月)～ 3月 7日(金)
	春季休業	3月10日(月)～ 3月31日(月)
	卒業式・学位授与式	3月15日(土)予定

発行 ● 石川県立看護大学

〒929-1212 石川県かほく市中沼ツ7番1
TEL 076-281-8300 FAX 076-281-8319
URL <http://www.ishikawa-nu.ac.jp>
E-mail office@ishikawa-nu.ac.jp